

introduction

野球肩は、本特集を企画した私にとって、そして読者の皆さんにとっても、いまだ解決しきれない難問と思われます。その難問に最前線で挑み続けておられる13名のエキスパートの先生方に執筆をお願いしました。

安達 玄先生、馬見塚尚孝先生は、発症メカニズムについて材料工学的視点から要因を5つに分類して「投球障害リスクのペンタゴン」と名付け、個々の選手に関わる要因のウエイトを考慮して治療にあたる重要性を示していただきました。

瀬戸口芳正先生には、発症のストーリーを理解するうえで考慮すべき要因として関節上腕靱帯と慣性の2つを挙げて、それらと障害発生の因果関係を検討していただきました。

三幡輝久先生は、豊富な新鮮凍結屍体肩を使ったバイオメカニカルスタディの結果を踏まえて、SLAP損傷と腱板関節包側不全断裂に対する手術方法の妥当性について解説いただきました。

藤井康成先生には、野球肩を治療・予防するうえで必須である機能的診断の担当をお願いしました。肩痛の要因として肩甲骨機能障害が特に重要で、それに関与する胸郭と骨盤機能評価について概説いただきました。

森原 徹先生は、早期競技復帰の重要性から治療のアルゴリズムを考案し、その過程で用いる診察室でのスクリーニングテストとリハビリテーションでの全身即時調整法をご紹介いただきました。

山門浩太郎先生は、野球肩の主病態がインターナルインピンジメントであると考え、その発生メカニズムについて文献の検討も踏まえて解説いただきました。

田中 稔先生には、肩にとって負担の少ない投球をするために必要な動作や運動機能とそれを習得するための運動療法をお示しいただきました。

小林尚史先生は、投球にとって重要なコア機能と動きのなかでの柔軟性を獲得するためにヨガの手法を診療に取り入れておられ、その概要をお示しいただきました。

石井壮郎先生は、モーション・シンセサイザーの研究を継続され、スマホを使って人工知能による自分の投球フォームの解析結果を閲覧できる段階まで到達されていて、その内容を解説いただきました。

浜田純一郎先生は、野球による肩・肘障害の主因は不良な投球動作にあると考え、投球の3つの基本動作上の問題点を、スマートフォンで録画した画像を観察して抽出して介入する方法をご紹介いただきました。

後藤英之先生は、投球動作に近似した肢位を含めて超音波で病変部位を評価して病態を把握するとともに、パワーブラやエラストグラフィによる評価の意義についても概説いただきました。

山崎哲也先生には、野球肩の鏡視下手術として、主に実施されているtype II SLAP損傷と腱板不全断裂に対するデブリドマン・修復術、有痛性Bennett骨棘に対する骨棘切除、後方関節包拘縮に対する後方関節包解離術の適応と術式を解説いただきました。

高橋憲正先生は、野球肩の手術療法の対象病変として代表的なtype II SLAP損傷に対する鏡視下手術の詳細と臨床成績について報告いただきました。

どの論文も明日からの診療にすぐに活用できる情報が満載です。ぜひ隅から隅まで目を通していただき、できるだけ多くのことを吸収していただきたいと思います。

あさひ病院スポーツ医学・関節センター
岩堀裕介